Osaka University Knowledge Archive

Title	メタフュシカ　第43号 彙報
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2012, 43, p. 139-143
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26500
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【彙報】

○　哲学哲学史・現代思想文化学

現在、哲学・思想文化学には、学部生が 37 名在籍しています。大学院哲学哲学史博士前期課程には 7 名、同後期課程には 10 名が、大学院現代思想文化学博士前期課程には 8 名、同後期課程には 4 名が在籍しています。上野修教授、入江幸男教授、舟場保之准教授、および須藤訓任教授、望月太郎教授、中村征樹准教授、入谷秀一助教の各教員が、臨床哲学所属の教員と連携しつつ、学生の教育・研究指導にあたっています。

本年度の講義・演習は、「ラカンを読む」「ライプニッツとスピノザ―様相の観点から」「スピノザ『エチカ』を読むⅪ, Ⅻ」「ドゥルーズの『差異と反復』を読む」「意味・真理・主体」（以上、上野教授）、「Discussing Horwitch's *Truth* (1), (2)」「問答の観点からの哲学的意味論・真理論」（以上、入江教授）、「カント『実践理性批判』を読むⅢ，Ⅳ」「カントの平和論をめぐる諸問題」「ドイツ哲学基本文献講読Ⅰ，Ⅱ」「J. ハーバーマスの思想Ⅵ」（以上、舟場准教授）、「ハイデガーの思想（1），（2）」「ショーペンハウアーとニーチェ（1），（2）」「現代哲学史概説」（以上、須藤教授）、「オルターグローバリゼーションの思想」「環境思想の諸問題」（以上、望月教授）、「大学と学問」「科学技術社会論研究Ⅰ，Ⅱ」「科学技術社会論の最前線」「ポスト東日本大震災の科学技術と社会」（以上、中村准教授）、「Writing Humanities Papers in English I, II」（望月教授・中村准教授）、「テオドール・W・アドルノの『ミニマ・モラリア』を読む」（入谷助教）という題目で行われています。また、その他に、修士論文・博士論文作成のための演習が定期的に行われ、活発な研究・討論が行われています。

また非常勤講師としては、樽井正義氏（慶應義塾大学）に「カントの社会哲学」、Michel DALISSIER 氏（同志社大学）に「Bergson et Nishida（ベルクソンと西田）」、平川秀幸氏（大阪大学）に「科学技術と現代資本主義」、重田謙氏（大阪大学）に「論理学初級（1），（2）」という題目で講義していただいています。

HP（http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy）ならびに You Tube にウェブ局「ヴィデオ・メタフュシカ」を開設し、研究室の活動状況などを公開しています。また海外に研究成果を発信するために、欧文機関紙 *Philosophia OSAKA* を刊行しています。

哲学哲学史・現代思想文化学の研究会として、handai metaphysica を開催しています。特別講演会として 2012 年 2 月 2 日には品川哲彦教授（関西大学）に「ケアと正義」という題目で、同年 6 月 12 日には DR. RACHEL ALBECK-GIDORN（Bar-Ilan University）に "The Influence of Spinoza's Thought on the Modern Jewish Culture" という題目で、同年 8 月 10 日には樽井正義教授（慶應義塾大学）に「カントにおける普遍性」という題目で講演していただきました。いずれにおいても活発な質疑応答がなされました。

研究例会としては、2012 年 3 月 6 日に藤野幸彦院生（博士後期課程）に「ミカエル・デラ・ロッカ、『スピノザにおける表象と心身問題』」、谷山弘太院生（博士後期課程）に「ラース・ニーハウス、『問題としての道徳』」、中村征樹准教授に「研究不正への対応を超えて：「リサーチ・インテグリティ」というアプローチとその含意」、多田雅彦院生（博士後期課程）に「反復者、反復そのもの、反復されるもの――ドゥルーズ『差異と反復』における反復の哲学の統一性について――」、原田淳平院生（博士後期課程）に「真理の理論は Truthmaker 理論にどんな影響を与

えるのか」、という題目で発表していただきました。いずれにおいても活発な質疑応答がなされました。

第六回哲学ワークショップ（テーマ「討議」・「フィヒテと意味の全体論」）が 2012 年 2 月 11 日に、第七回哲学ワークショップ（テーマ「＜善＞／＜悪＞概念の解体と再構築の諸相―スピノザの場合／ニーチェの場合―」・「命法なき規範はいかにして可能か」・「超訳系哲学とは何か」）が同年 7 月 7 日に、それぞれ開催されました。

新入生歓迎イベント「フィロソフィカル・フィッシュボール」が 2012 年 4 月 19 日に、「世界哲学の日記念セミナー」（須藤訓任著『ニーチェの歴史思想――物語・発生史・系譜学――』を読む）が同年 11 月 17 日に、それぞれ開催されました。

上野教授が主宰されている「近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」（科研基盤研究（B））の特別講演会が 2011 年 10 月 8 日（大阪大学）、同月 10 日（東京大学）、2012 年 2 月 29 日（東京大学）、同年 3 月 10 日（大阪大学）、同年 11 月 4 日（同大学）に、研究会「17 世紀とスピノザの傷痕」が 2011 年 11 月 27 日（東京大学）、「現代思想のトラウマとしてのスピノザ」が 2012 年 5 月 19・20 日（大阪大学）、「カントにおけるスピノザ問題」が同年 11 月 24 日（同大学）、そして総括シンポジウム「近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」が同月 25 日（同大学）に、それぞれ開催されました。

上野教授が月刊雑誌『本』（講談社）にされていた「様相の十七世紀―哲学史のワンダーランド」は 2012 年 7 月で連載を終了しました。単行本化が予定されています。また同教授の共著『西洋哲学史 3「ポスト・モダン」のまえに』（講談社メチエ）が同年 6 月に刊行されました（「ホッブズとスピノザ」の章を担当）。

入江教授がアメリカ哲学会太平洋部会大会（シアトル、2012 年 4 月 6 日）にて ‘Philosophy in Japan after WWII’ という題目で、また国際会議「カント、フィヒテとドイツ観念論の遺産」（ネブラスカ大学、同月 9 日）にて ‘Semantic Holism and Fichte’s Wissenschaftslehre’ という題目で発表を行いました。

望月教授が International Symposium on “Philosophical Practices in Peace-Building and Sustainable Development” (17 March 2012, Pannasastra University of Cambodia, Phnom Penh, Cambodia) で、The role of Philosophical Practice in Disaster Recovery という題目で、口頭発表を行いました。

舟場准教授が寄稿されている著書『カントを学ぶ人のために』（有福孝岳、牧野英二編、世界思想社）が 2012 年 5 月に刊行されました（コラム①「批判の可能性を考える」を掲載）。

舟場准教授がルッツ＝バッハマン教授 60 歳記念会議 “Das Wissen des Klugen: phronesis, prudentia und moralisches Handeln in Mittelalter und Neuzeit” (2012 年 3 月 28 日 ～ 31 日、Villa Vigoni-Gespräch in den Geistes- und Sozialwissenschaften, Deutsch-Italienisches Zentrum, ITALY) にて、“Gilt dieser oder jener Satz zwar in thesi, aber nicht in hypothesi? Klugheit bei Kant” という題目で、6. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium (同年 8 月 24 日、Europazentrum der Waseda-Universität, Bonn, GERMANY) にて、“Humanitäre Intervention und Menschenrechte” という題目で、発表を行いました。

入谷助教と重田謙氏（大阪大学非常勤講師）が共著者となっている『生命と倫理の原理論――バイオサイエンスの時代における人間の未来――』（大阪大学出版会）が 2012 年 3 月に刊行されました。

嘉目道人院生の論考「事行としての自己関係性 ―フィヒテ知識学の言語哲学的変換に向けて―」が『フィヒテ研究』（第 19 号、2011 年）に掲載されました。

嘉目道人院生が関西倫理学会（2011 年 10 月 30 日、関西大学）にて「討議倫理とフィヒテの道徳論―道徳原理の根拠付けについて―」という題目で、さらに日本哲学会第 71 回大会（2012 年 5 月 12 日、大阪大学）にて「「究極的根拠付け」か「生活世界の人倫性」か―討議倫理をめぐるアーペルとハーバーマスの論争―」という題目で、11th Biennial Meeting of North American Fichte Society（同月 19 日、ラヴァル大学、カナダ）にて “What is the Unlimited Communication Community? Transcendental Pragmatics as Contemporary Fichteanism” という題目で、また須賀佳苗院生が第七十五回上智哲学会大会（2011 年 10 月 30 日、上智大学）にて「カントの占有論における「生得の権利」の位置付けと意義」という題目で、さらに近代倫理学研究会（2012 年 7 月 28 日、早稲田大学）にて「『人倫の形而上学』「法論」における法の法則と生得的権利について」という題目で、また原田淳平院生が日本哲学会第七十回大会（2011 年 5 月 14 日、東京大学）にて「真理論のフロンティア―真理の多元主義の可能性―」という題目で、さらに応用哲学会第四回大会（2012 年 4 月 21 日、千葉大学）にて「真理概念はデフレ化することができるのか」という題目で、また田中悠介院生が日仏哲学会春季大会（同年 3 月 31 日、京都大学）にて「ベルクソンにおける経験的事実としての「開かれたもの」の意義」という題目で、また谷山弘太院生がショーペンハウアー協会第 17 回ニーチェセミナー（同年 5 月 3 日、八王子セミナーハウス）にて「歴史的批判と必然性の認識～『人間的、あまりに人間的』より～」という題目で、また山本哲哉院生が 2012 年哲学若手研究者フォーラム・萌芽研究セッション（同年 7 月 22 日、国立オリンピック記念青少年総合センター）にて「生成と存在、あるいは物語としての歴史と出来事としての歴史」という題目で、それぞれ発表を行いました。

（入谷）

○　臨床哲学

本年度の当研究室の在籍者は、学部生が 26 名、大学院生が 27 名（前期課程 16 名、後期課程 11 名）である。中岡成文教授、浜渦辰二教授、本間直樹准教授（兼任）、大北全俊助教の各教員スタッフが、哲学哲学史・現代思想文化学の教員と連携しつつ、教育・研究活動に従事している。

本年度は非常勤講師として、久保田徹特任准教授（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）に本間直樹准教授と共同で「思考の活動とメディア」を担当していただいた。

2012 年 3 月に研究室の雑誌『臨床哲学』13 号を昨年度と同様に web 上で刊行した。また本年度より年 2 回の発行とし、2012 年 10 月に同 14-1 号を刊行した。13 号は論文 3 編、翻訳 1 編（解題つき）、研究ノート 2 編を、14-1 号は論文 3 編と中岡成文著『試練と成熟　―自己変容の哲学―』合評会の記録を掲載した。また『臨床哲学のメチエ』を学部生と院生の共同編集のもと 18 号と 19 号を発刊した。19 号はダリル R. J. メイサーの『ゲームで学ぶ倫理・道徳　生命倫理学ユネスコチェアプログラム 2008』の翻訳を掲載した。

昨年度に引き続き本年度も臨床哲学研究会を季節ごとに定期的に開催した。昨年度の開催について、まず 2011 年 10 月 8 日に「第 26 回臨床哲学研究会」を開催した。准教授の本間直樹と博士前期課程在籍の辻明典が共同で「南相馬と臨床哲学」、そして博士後期課程在籍の東暁雄が「手続的正義と規範としての法」、同じく博士後期課程在籍の森本誠一が「市民参加型社会へ向けた公衆関与のあり方について――英国ビーコンズ・プロジェクトの取り組みを手がかりに」を発表した。そして、2012 年 1 月 14 日に「第 27 回臨床哲学研究会」を〈「ケアの臨床哲学」研究会〉〈患

者のウェルリビングを考える会〉〈〈ケア〉を考える会〉と共催で、シンポジウム「高齢社会におけるケアを考える」として開催した。シンポジストとして本研究室教授の浜渦辰二（〈「ケアの臨床哲学」研究会〉代表）、藤本啓子（〈患者のウェルリビングを考える会〉代表）、林道也（〈〈ケア〉を考える会〉代表）が話をし、質疑応答を行った。本年度に入り、2012 年 4 月 8 日に「第 28 回臨床哲学研究会」を開催した。博士後期課程在籍の正置友子が「子どもたちと絵本の扉をひらく」、栗田隆子（ライター）が「怒りと呪いの共同体―女の貧困を考える」、西川勝（大阪大学特任教授）が「貝原益軒『養生訓』から考える」を発表した。そして、2012 年 7 月 8 日に「第 29 回臨床哲学研究会」を開催した。個人発表として紀平知樹（兵庫医療大学准教授）が「待機する社会としての定常型社会」を発表、その後、本研究室教授の中岡成文が刊行した『試練と成熟―自己変容の哲学―』の合評会を評者に村上靖彦（大阪大学准教授）、田中俊英（NPO 法人淡路プラッツ代表）、文元基宝（博士前期課程在籍）を招いて行った。直近では 2012 年 10 月 21 日に「第 30 回臨床哲学研究会」を開催した。博士後期課程在籍の徐静文が「中国におけるターミナルケアの歴史と現在」を発表、そして山崎竜二（（株）国際電気通信基礎技術研究所研究員）を招いてシンポジウム「遠隔型ロボットを介したコミュニケーションの可能性――石川県宮竹小学校の授業を通して考える」を開催した。本年度は、2013 年 1 月 20 日に開催を予定している。

中岡成文教授が、2012 年 4 月 10 日に大阪大学出版会より『試練と成熟　―自己変容の哲学―』を出版した。また 2011 年 11 月 17 日に第 43 回大阪大学二一世紀懐徳堂講座「ここから拓く未来」で「「復興する」ために――臨床哲学から」という題で講演を行った。2012 年 6 月 22 日には、台湾の中央研究院で開催された「第 4 回漢学国際会議」“The 4th International Conference on Sinology” において、英語講演「自己のテクノロジーと臨床哲学」（Self Technology and Clinical Philosophy）を行った。

浜渦辰二教授は、自身が代表をしている「ケアの臨床哲学」研究会の主催するシンポジウムを 2012 年 1 月 14 日（シンポジウム「高齢社会におけるケアを考える」、「第 27 回臨床哲学研究会」として共同開催）と 2012 年 5 月 5 日（シンポジウム「高齢社会のなかで北欧ケアを考える」）に、いずれも大阪大学中之島センターで、また 2012 年 7 月 7 日に上野千鶴子講演会「おひとりさまの最期」を大阪大学会館講堂にて開催した。そして、これまでの活動の記録を『ケアの臨床哲学―シンポジウムの記録』として 2012 年 3 月 30 日に発行した。また、2012 年 2 月 19 日には「高齢者ケアフォーラム：老いること、生きること、食べること」（キャンパスプラザ京都）にてシンポジウムに参加し、2012 年 3 月 25 日には「リビングウィル勉強会：脳死と臓器移植」（神戸国際会議場）にて講師をつとめた。ISAP プログラムによるドイツ・ハイデルベルク大学との講師交換協定により、2012 年 7 月下旬に 2 週間ハイデルベルクに滞在し、同大学哲学研究所における講演「Watsujis „Ethik“ als Anthropologie – Zur Rezeption deutscher Philosophie in Japan」、翻訳・通訳研究所における講演「現代日本における死をめぐる状況」、日本学研究所における講演「Watsujis Übersetzung der deutchen philosophischen Vokabeln」、ライン・ネッカー友の会における特別講義「現代日本社会における“生老病死”」を行なった。

本間直樹准教授が総合コーディネータをつとめている「中之島哲学コレージュ」も、毎月セミナーと哲学カフェを定期的に「アートエリア B1」にて開催している。また、2012 年 7 月 16 日に韓国で開催された第十一回哲学プラクティス国際会議にて「哲学プラクティスのコミュニティ・アプローチ」を発表した。

大北全俊助教が、2011 年 12 月 13 日に、大阪大学最先端ときめき推進事業「バイオサイエン

スの時代における人間の未来」第 26 回ときめき☆セミナーで「HIV 感染症対策とビオポリティーク」を発表した。2012 年 3 月 21 日に、「合意形成科研第二回研究会」（科研課題名：不確実性に対する合意形成に関する応用倫理学的考察）にて「日本の国民健康づくり運動に関する思想について 『健康日本 21』を中心に」を発表した。

本年度の開講授業は以下の通り。「倫理学の研究方法 A・B」（浜渦、中岡、本間、大北）、「臨床哲学ネットワーキング 12 前・後」（中岡、浜渦、大北）、「臨床哲学研究 A・B」（浜渦、中岡、本間）、「臨床哲学概論 12」（中岡、大北）、「自己変容の哲学 12 前・後」「Ethics in English 2012」「ヘーゲル哲学を読みぬく 12」（以上、中岡）、「ケアの臨床哲学―人間の死とそのケア―」、「フッサール間主観性の現象学のゆくえ」、「ケアの臨床哲学―人間の死とそのケアを考える―」、「フッサール間主観性の現象学のゆくえ（外国語文献演習）」（以上、浜渦）、「思考の活動とメディア（8）・（9）」（本間、久保田）、「フランス語関連文献講読演習（1）・（2）」、「哲学的コミュニケーションの探究と実践（3）・（4）」（以上、本間）。

（大北）